

岐阜セラック製造所は、セラック（shellac）という天然樹脂の精製から創業しました。かつて軍需物質として使用されていたセラックは、戦後、熱により硬化した状態で倉庫に放置され、有用資源とは程遠い状況でした。そこで当社は、工業的に解重合によって硬化セラックを再生させることで、セラック本来の機能を取り戻すことに成功しました。捨てれば公害、拾えば資源。どんなものからも可能性を見出す力。当社の起源はここにあります。

セラックは熱硬化性樹脂として成形材料、接着剤など広く使われていましたが、これらの用途はほとんどが合成樹脂に変わりました。それに対応するために、独自の技術を創り上げながら、新分野へも挑戦を続けてきました。現在の「天然物抽出事業」「合成樹脂事業」「精密分散事業」の三本柱は、市場の要求と我々の技術との合致から生み出されました。

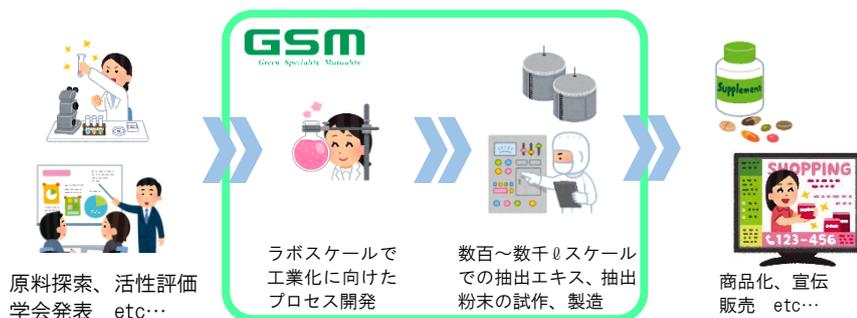
天然と合成を融合して 地球に優しい健康美と 機能美を創造する

尾木信藏 名誉会長



天然物抽出事業

家業であるセラックのアルコール抽出・精製技術を、植物からの機能性成分の抽出・精製に応用展開したことで誕生したのが天然物抽出事業です。



例えばサプリメントの場合、製品が出来上がるまでには、原料探索から始まり、商品の販売、宣伝までに様々なステップがあります。大手食品メーカーの素材研究による有用物質に対し、その目的に応じた製造プロセス開発を行い、メーカーが使いやすい製品として供給するだけでなく、当社独自で開発した素材を市場に出しています。

👉 ここがポイント！

当社ではセラックの抽出・精製にアルコールを用いるため、食品工場でありながらも有機溶剤の取扱いに慣れています。実際、当社の天然物抽出精製工場は食品製造だけでなく、危険物取扱工場としての認可を受けおり、これによって水溶性成分だけでなく、脂溶性有用成分の抽出が可能になっています。また、保有している設備も充実していることで、より高度な精製を可能にしているのです。技術、設備の面から、他社にはできない案件が多く、たくさんのご依頼と信頼をいただいています。



展示会特集 2019-5月号

Vitafoods 2019

世界最大 健康補助・機能性食品展
05.09-05.11 ジュネーブVitafoods
Europe7-9 May 2019.
Palexpo, GenevaBE HERE.
THE PLACE WHERE INNOVATION HAPPENS.

Register for FREE



賑わう展示会場

海外に技術発信

5月9日から11日までの3日間、スイスはジュネーブにて行われた Vitafoods という展示会に参加しました。展示会とは世界各国から有数の企業が集まり、自社が持つ技術をアピールする場。Vitafoods はその中でもヨーロッパ最大のサプリメント、栄養剤、機能性食品の素材の展示会として知られ、世界中から2万1,000人を超すバイヤーや業界関係者が訪れます。そんな展示会に当社もブースを出し、技術発信、情報収集をしてきました。



ブースは華やかでデザインに凝ったものが多く、目を眩しました。中にはブースの高さが5mを超えるようなものもあり、会場内は一種のテーマパークのようでもあり、百貨店のコスメフロアのようなワクワク感がありました。



各ブースには、興味を持った方と企業とが商談のできる場所が作られていますが、それがカフェのようにお洒落にデザインされたところもありました。直接の対話ができるのが展示会の利点です。中にはシャンパン片手に談笑するシーンもあり、文化の違いを感じました。

Innovating For Health !

各社が販売している健康食品の数々は、会場に設置されたテイastingエリアで試食することができます。各ブースでも試食品の配布がありますが、このエリアでは各社のサンプルを食べ比べできるため、ついつい手がのびてしまいます。



中には素材と自然のイメージを押し出したデザインのブースもあり、ひときわ目立っていました。第一印象を重要視するのは海外でも同じようですね。





今回の展示会において、ある注目すべきワードがありました。「**ビーガン**」って、ご存知ですか？近年は日本でもたまに耳にするようになった単語ですが、これは徹底した「菜食主義者」の方々を指す言葉です。Vitafoods ではビーガンの方に対応した製品が数多く並ぶようになりました。では、ビーガンって、どんな菜食主義の方を指すのでしょうか？ベジタリアンとはどちらがうのでしょうか。そして、ビーガンの方に対応した製品って、どんなものなのでしょうか？

多様な「菜食主義」事情

世の中には菜食主義、つまりベジタリアンとは言っても、様々なあり方があります。人よりも肉を食べる量が少ない人、肉だけでなく、工業的に作られた植物性食品も食べないオーガニック志向のひと、乳製品は食べられるひと、乳製品も食べられないひと、そしてその厳格さも様々です。中には、収穫によって植物そのものを殺すような根菜は食べず、熟れて落ちた実だけを食べる方もいます。それらは全て、ベジタリアンと括られます。その中でも非常に厳格に菜食主義を貫くのが、ビーガンと呼ばれる人たちです。



ビーガンの方は、衣食住すべてにおいて、動物性のものを全く利用、摂取しません。そのため、肉類はもちろんのこと、豚皮を原料とするゼラチンや魚醤、ハチミツなども不可。衣類においても毛皮などは使いません。

そのため、健康食品やサプリメントにおいても、素材に動物性のものが含まれていると、使用できないのです。しかし、これまで生産されてきた製品は動物性のものが非常に多く、ビーガンの方は使用できませんでした。

sustainably driving the future of nutraceuticals

「健康栄養の未来を持続可能なものに」

これは、Vitafoods Europe 主催の代表である Chris Lee 氏が掲げたテーマです。

医療が発達したことで人生 100 年と言われるようになり、すでに多様化していた食文化が「健康」を基準にさらに細分化されつつあります。今回の展示会で「Vegan Friendly」の製品が増えたのは、そんな未来を見据えた企業が、近年爆発的に人口を増やしたビーガンに着目した結果だと言えます。アメリカにおいてはビーガンの人口が 2009 年に比べ 500% 増加しており、今後間違いなく大きくなっていく市場でしょう。

ひとの生活が豊かになったことで、様々な主義、信条が認められていくようになりました。その結果現れたもののひとつが、「Vegan Friendly」という市場です。今後も時代の変化に伴い、新しい文化が生まれ、そこに新しいビジネスチャンスが生まれていきます。そんな激動の未来を生き抜くために、我々は常に未来を見つめ、未来でも永続的に愛される製品を開発していかねばなりません。

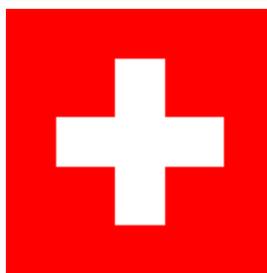


展示会特集 2019-5月号

Vitafoods 番外編

アルプスの国 スイス

05.09-05.11 ジュネーブ



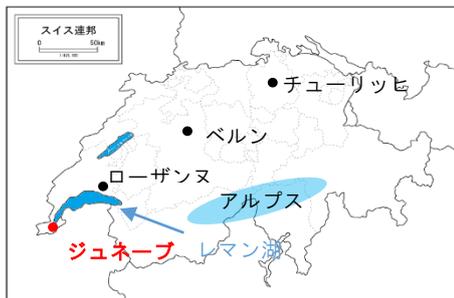
「海外移住者が最も住みやすい国」
ランキング

世界



位

HSBC 調べ

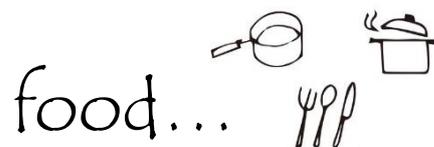


スイスと言えばやっぱりアルプス！緑色の高原に、そびえ立つ白い山々、ヤギにチーズ。三角屋根の民家。そんなイメージでしょうか。
実際、スイスはアルプス山脈が国の代名詞になっており、マッターホルンをはじめとした 4000m 級の山が数多く点在している国です。他にも多くの湖があることでも有名で、大自然に囲まれた様子が容易に想像できます。
2015 年には国民幸福指数が世界一となり、永世中立国としても名高いスイスはやはり平和の国のようです。



スイスは山が多いことで、作物が非常に育ちにくい土地です。そのため、現在でも農作物のうち 70%以上が畜産物。しかし、そのおかげでローマ皇帝がわざわざ輸入するほど、発展したチーズ文化を持っています。

フランス、ドイツ、イタリアに囲まれているため、食文化は各国の特徴が混ざったものようです。実際、今回の旅でも、ドイツを感じさせる美味しいジャガイモ料理や、カプレーゼやピザなどのイタリア料理。



フォンデュはフランス語ですが、スイスを代表する料理でもあります。モッツアレラチーズは日本のものとは大きく異なり、アイスクリームやお豆腐に近い触感と味わい深さで本当に驚きました。



Chocolate♡



実はチョコレート大国のスイス。消費量はなんと日本の 5 倍！街中にはチョコレート専門店を多く見かけました。カラフルなチョコをショコラティエが案内してくれる、日本にはあまりない光景で新鮮でした。

Café Terrace



街中にはテラス席を多く見かけました。店内での飲食よりも屋外での飲食が好まれるようで、大通りを埋め尽くすほどにパラソルやイスが並べられていて、不思議な光景でした。個室を好む日本人とは全く違う考え方のようです。



Nature



レマン湖の遊覧船から。一日に何度も運行しており、澄んだレマン湖と美しい街並みを見ることができます。

空いた時間でレマン湖の遊覧船に乗りました。向こう岸が見えないほど大きく、湖だとは思えない大きさでした。また、ジュネーブとフランスの堺にあるサレーブ山にも行きました。1,000m 級の山ですが、中腹まではロープウェイで登ることができます。そこからはジュネーブの街なみやレマン湖、フランスの街並みも見ることができます。日本は島国のため、国境を実感することはあまりありません。それだけでも海外との文化の差を大きく感じました。



サレーブ山のロープウェイから見たフランス側の景色。ジュネーブの街とは少し違った雰囲気建物が並んでいます。